

孤高の画人 下村 為山

元松山市考古館長 大野 慶一
伊予史談会会員

一、為山の人となり

下村為山は本名は下村純孝であり、為山とは画人としての名である。別に雅号として牛伴という名も使っている。

為山は伊予松山の人であり、慶応元年（一八六五）に松山市



下村 為山（大正12年3月）

の三番町、松山藩の士族の家に生まれた。父は純嘏といい、大変教育に熱心であり、為山にも十一歳で漢詩を学ばせたほどであった。もともと字を書くのが好きで、家の中の庭で字や絵を書いて遊んでいたという。十八歳で上京し、初め漢学塾へ入

り、暫くしてから、本多錦吉郎の洋画塾へ入り、洋画を勉強した。

明治二十二年、二十五歳で明治美術会第一回展に出品し、森鷗外より批評を受け、翌二十三年の第三回では「慈悲者殺生」を出品褒状を得、これが為山の油彩画の代表作といわれる大作になった。

その外、明治美術会第二回展や三回展に出品し、出色の作として絶讃されている。

このように洋画家として登場したが、明治二十四年（一八九一）、従兄の内藤鳴雪を通じて正岡子規を知り交流を深め、俳句を始める。

子規は既に俳句に熱心で、俳壇で有名であった。為山は子規の句会にも毎回熱心に出席し、子規を通じて新聞「日本」や雑誌など出版物の装丁、挿絵なども描いて協力する。柳原極堂が出している「ほととぎす」の表紙に美事な鶏頭を描いたり、子規の手に移った「ほととぎす」の表紙絵や口絵を依頼されたり、当時は俳句よりも絵で認められていた。同じ頃、子規に協力していた中村不折と良いライバルで励ましあい、競いあいをする程で、為山は後に日本画と洋画の優劣を論じ、子規に洋画の眼を開かせもした。そうして遂に俳画に興味を持つようにな

った。なかんづく、中村不折は子規の要求に応じて、子規の気に入るような描き方をしたが、為山は子規といえども頑として応じない気性の激しい面もあったという。

明治二十八年、三十一歳で「松風会」に参加し、地元「海南新聞」に句を出す。三十年には、「一葉全集」に樋口一葉の肖像画を描く。三十三年に浅井忠がパリへ、三十四年には中村不折がヨーロッパ留学をするが送別会に彼自身は行かない。

二、洋画からの脱却

明治三十四年（一九〇一）、三十七歳の折に関西美術会第一回展覧会に出品。以後東京を離れ、大阪に行き、南海電鉄初代社長松本重太郎の肖像画を描く。

明治三十六年（一九〇三）、松山の生家に帰り、肖像画家として県内を転々とし、新しい日本独自の風景画を描きはじめ、日本画の創造に没頭する。

九月十九日には松山の正宗寺で開催された子規一周忌に参加する。

その後、正宗寺の子規埋髪塔落成式に出席する。埋髪塔の子規肖像画も為山の描いたものである。

その外、松山物産共進会に水彩画「晩秋」「松山城」を出品

此里の新酒に早し新豆腐 為山句画



柿雀 軸幅

したり、松山市教育協会の主催で「鉛筆画講習会」の講師として市内の高等小学校教員に鉛筆画を指導したりしている。

明治四十四年（一九一）には松山市制二十周年記念の市章を選考し、審査して制定する（為山のデザインしたもの）。

また三由淡紅や河東碧梧桐の俳人と郡中彩浜館で遊んだり、高浜虚子と伊豆、熱海に遊んだり、俳人たちと交遊を続けている。

三、日本画としての俳画（俳味画）

為山は子規に触発されて俳画をはじめ、のめり込んでいくと同時に、本来憧れていた洋画をすてていったのは、俳画への意欲が洋画の意欲に勝っていたということであろうか。子規が俳句の近代化をはかり、めざして

いったように為山もまた俳画の近代化をめざしたといえるのではないか。しかし、為山は俳画家でありながら、俳画家と呼ばれることを嫌ったという。

当時俳画というものは、軽く見られ本格的な日本画の水墨画とは別物のように受け取られていたことに、反発するものがあったのであろう。先に述べた村不折はねばり強く洋画を追究し、後年帝國美術院会員となり、画壇に金字塔をうちたてた



松と山をデザインした松山市の市章

が、為山は一介の俳画家として一生を終わった。為山は東京や大阪、松山と各地を転々として日本画の修業に明け暮れ、十年ほど修業に尽くしたが、彼の画境を開いたのは、伊予の山河であり、風土であったことは間違いないであろう。松山市の市章の松と山のデザインもこうい



樋口一葉像。為山の鉛筆画（明治30年）

四、為山の人脈

ことと無縁ではない。

新しい日本画の確立 俳句との出会い

為山は、明治三十七年（一九〇四）ごろ、松山を中心に子規堂をはじめ子規に関する活動を展開した。それから約五カ年に



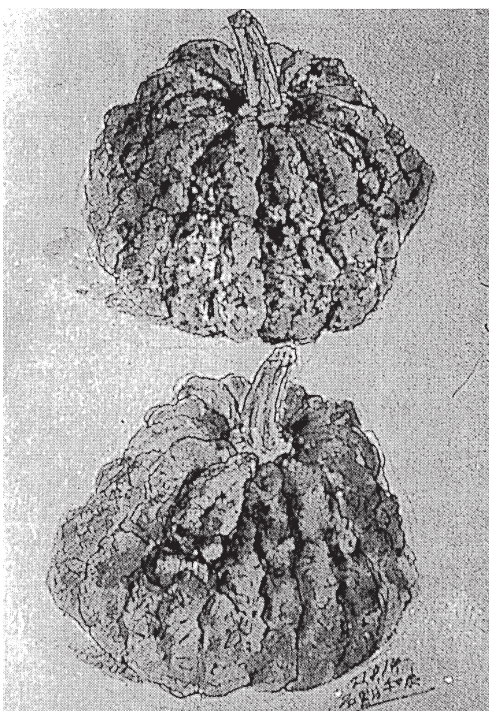
為山自画像（安藤正楽宛のハガキ）

亘り、為山は安藤正楽の世話で、東予を転々と歩き、依頼に応じて絵を描きつづけるのである。この間の作品には屏風から半折まで多彩であり、とくに為山から正楽にあてた書簡葉書は絶品であり、二人の交遊の美しさを表している。為山が絵に苦しんでいる様子や、正楽が為山に対して色々注意を与え、画家としての信義を守る大切さを教えている。その中に正楽宛の為山の真情あふれるもの一片を示しておこう。

五、晩年の下村為山

下村為山の名は、松山でも知らない人が多い。ましてや俳号の「牛伴」についてもだれの雅号か知らない人が多い。ただ、松山市草がだれのデザ

だって、僕は決してそれらに劣って居るとは思わない。僕独自の境地、僕独自の優れたものを描いて居る。古今独歩のものを描いて居るんだ」
 なんとという独立独歩の自信に満ちた文面であろうか。ここに為山のすべてが凝縮されているといえよう。このように安藤正楽とは師弟を超えて人間としての友情をみるのである。



「かぼちゃ」（紙淡彩）

インのものか、子規とは二歳年長であったとはいえ、真面目に、真剣に俳句を勉強したり、鉛筆画ではあるが、秀れた肖像画を描く画人であった事は覚えていてほしい。
 明治十八年（一八八五）二神フジと結婚し、松山藩の藩医二神家の養子となり、翌年長男親吉が誕生したが、明治二十八年、離婚し、大正四年渡辺愛子（二十六歳）と再婚するなど、家庭的に問題なしとしない。
 大正三年（一九一四）、軽い脳溢血をおこし、右手に後遺症を残し、旅行が出来なく、風景画の制作をあきらめる。更に神経衰弱を病みほぼ治ったとみえたが昭和五年神経衰弱再発。医師より一切の執筆を止められる。等、病気や家庭の複雑な事情になやまされ乍ら、戦時中、

長野・富山と疎開をし、最後のスケッチ八十二歳で「かぼちゃ」を描くなど画人としての信念を貫き通し、昭和二十四年（一九四九）富山県東礪波郡福光町で永眠。当年とって八十五歳であった。
 人間的、家庭的に不幸な中で郷土松山へ帰ることなく異郷で去った孤高の偉人を偲びたい。
 合掌

〈参考文献〉

- 1、下村為山 没後五十年記念作品集
- 2、子規と為山と安藤正楽 山上次郎
- 3、下村為山（牛伴） 俳句集 為山顕彰会編
- 4、下村為山 百点会編集
- 5、愛媛県史（人物編） 愛媛県